

佳作

曾祖母と手紙

山形県 米沢市立第四中学校二年 石井 倅之介

手紙を書く、という経験をみなさんはしたことがあるだろうか。僕は手紙が大好きで、転校して遠くに住んでいる友人とやり取りをしたり、好きな作家の先生にファンレターを書いたりしている。手紙というのは自然と人の心を和ませるから不思議だ。その手書きの文字から、思いが伝わってくるのも良い。僕の曾祖母も手紙が好きなんだ。僕がまだ幼稚園に通っていた頃はひらがなばかりの手紙をくれた。その内容は常に僕や僕の家族を思いやるものだった。

「げんきですか。かぜひいてませんか。」

「倅之介君は水泳したり、勉強と大変でしょうが、がんばりすぎず、けがしないよう、かぜひかないよう、きをつけてくださいね。」

このような優しい文面に何度も励まされ、ホッと落

ち着いた気持ちになった。

毎回返信をくれる曾祖母だったが、一回だけ、僕が出した手紙に返事が来ないことがあった。それは、僕が去年の曾祖母のお葬式で読んだ手紙だ。もう、この世にはいない曾祖母。書き出しを書くのに苦労して、返事が返ってくるはずのない手紙を書くことの難しさを、その時初めて味わった。でも、何とか書いているうちに、曾祖母との思い出が次々と頭に浮かんできた。通知表を誰よりもしっかりと見てくれたこと、いつも食べ切れないほどのお菓子をくれたこと、おいしい料理を作ってくれたこと、昔の話を教えてくれたこと……。どの思い出からも曾祖母の愛情が伝わってきて、どれだけ素敵な曾祖母だったのかを実感した。そんな思い出を綴っているうちに便箋は残りわずかになった。僕は最後にこう書いて締めくくった。

「ばっちゃんひ孫で幸せです。」

その手紙で僕が伝えたかった思いは、ちゃんと曾祖母に伝わっただろうか。その答えは今でも分からないし、これからも分かることはない。でもあの曾祖母のことだから、きっと僕の思いを受け取ってくれたんだろうと信じている。曾祖母との手紙のやり

取りは僕にとって、何にも変えることのできない宝物だ。

手紙で思いを伝えるというのは簡単そうで意外と難しい。けれど、手紙を書くとき自分のことももっと知ることができるとは思えないだろうか。自分の思いを文章で表して可視化することで、自分という人間がどんな思考の持ち主なのかよく分かる。手紙を書くとき、相手だけでなく自分のことも知れるのだ。だから僕はこんなにも手紙が好きなのだと思う。

僕はこれまで、手紙を通じて大切な人の優しさを感じ、思いを受け取ってきた。また、自分も相手を通して手紙を書く中で、文章に表された自分らしさを見つけることができた。こうして、手紙を通じて自分だけの色を磨いていくことは、大変だけれど楽しいことだ。僕が持っているたくさんの曾祖母からの手紙。曾祖母とのやり取りから学んだ優しい気持ち、言葉で伝えることの大切さを、今度は僕が色々な人に伝えたい。